⑬　安　田　愛　子　氏　（択捉島元島民）

北方領土がどこにあるのか、皆さんはご存じですよね。

北方領土は根室の北東に位置しています。

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島、この四島を合わせて北方領土と呼んでいます。また、北方四島ともいいます。

まず、最初に北方領土の概要をお話しいたします。

色丹島、歯舞群島は、大昔、根室半島と続いていたと言われています。長い間の土地の陥没等によって、このように離ればなれとなった島といわれております。

また、その東北に位置する択捉島、国後島は、真ん中を火山が走っております。そして千島列島に連なっています。千島列島というのは、ウルップ島からカムチャッカ半島の一番近くのシュムシュ島までの 18 の島を千島列島と呼んでいます。この二つの島は、中央に山脈を挟んで太平洋側とオホーツク海側に分かれています。細長い島なので川は短く、急な川がたくさんあります。滝もたくさんありますし、温泉も出ています。

山は、1,000m以上の山が 14 ほどあります。国後島で一番高い山は、爺爺岳（ちゃちゃだけ）の 1,822mです。択捉島では散布山（ちりっぷさん）の 1,587mです。海の方から眺めると、とてもすばらしい山です。

川では、一番長い川は私が生まれたところの藥取（しべとろ）川で、長さが 28 ㎞あります。皆さんの住まわれている池田と幕別の間に十勝川が流れておりますが、十勝川は十勝岳を源流に 204 ほどの支流が流れ込んでおり、大津まで行って太平洋に流れていますね。長さは 156 ㎞です。

気候ですが、北方領土というと、とても寒いと思われがちですが、そんなに寒くはありません。冬でも－6℃か－7℃、夏でもプラスの 16℃から 17℃です。雪も 50 ㎝ほどしか降りません。根室地方と同じくらいの気候と思っていただけるとよいと思います。

作物は、何でも採れます。イモ、ニンジン、ナス、ダイコン、ほとんどの作物は採れますが、日照時間が少ないために、トマトなどは十勝のように赤くなりません。

次に、動物、魚、それから鳥、花について調べていきたいと思います。

陸の動物では、キツネ、クマ、リス、クロテンなどがいます。国後島にはヘビがいますが、択捉島にはいません。

鳥は、カラス、ヒバリ、ノビタキ、ノゴマ、ハヤブサ、オオワシ、オジロワシなどがいます。

川にはサケやオショロコマ、ヤマメ、ウグイがたくさんいました。

花は、ユリ、ガンコウラン、ハマナスの群生があちこちで見られます。

湖にはハクチョウやカモもおります。内保湖にはマリモも生息しております。

海の動物では、トド、ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシ、オットセイ、クジラ、ラッコがいます。鳥ではウミガラス、ウミネコ、ケイマフリ、エトピリカなどが見られます。択捉島は日本有数の捕鯨基地です。捕鯨場が４つほどありました。みなさんラッコはご存じだと思いますが、数年前に釧路川にラッコが迷い込んできて、新聞やテレビで報道されていましたね。なぜラッコの毛皮が貴重かというと、動物の毛は通常、片方にしかなびかないのですが、ラッコの毛は両方になびくので貴重な毛皮とされています。

北方領土の周りの海は、暖流と寒流が接しており、魚の宝庫です。世界の三大漁場とも言われています。水産物の主なものは、サケ、マス、カニ、サンマ、エビ、ホタテ、昆布、海苔などがたくさんとれます。特に昆布は歯舞群島あたりがたいへん採れます。この水産物は島の工場で缶詰になったり、干物になったりして、日本はもちろんですが、遠く外国まで輸出しておりました。

林業ですが、島のほとんどが森林に覆われています。良質の木材が生産されていました。主にエゾマツ、トドマツです。原木のまま、根室や函館に送られていました。木の一部は島で製材になって建築用の材料になったり、魚の箱となったり、燃料として使われていました。

鉱業ですが、古くからの調査で、硫黄、金、銀、銅があることがわかっておりましたが、交通が不便だったために、昭和に入ってから、少しずつ生産されるようになりました。

交通手段は馬です。馬しかありませんでした。道幅が狭く、「けものみち」のようなところをいつも通ります。坂道が大変多くて、交通は大変でした。そのため、海側の固い砂浜を道路代わりとして使っていました。数年前に択捉島を訪問したときも、ロシア人の方が砂浜を道路代わりとして車で走っておりました。

次に、島の広さですが、この四つの島で択捉島が一番大きいです。全長は 204 ㎞、幅は狭いところで6㎞、広いところで 30 ㎞しかありません。面積は 3,184 ㎢で、他県と比べると、鳥取県と同じくらいです。

国後島は全長が 122 ㎞です。幅は狭いところで7㎞、広いところで 30 ㎞くらいしかありません。広さは 1,499 ㎢で、沖縄本島と同じくらいです。

色丹島は 253 ㎢で、徳之島と同じくらいです。

歯舞群島全部合わせて、100 ㎢ほどありますが、小笠原諸島と同じくらいの面積です。

全部合わせて 5,036 ㎢あります。他県と比べると、愛知県や千葉県と同じ広さになります。

北海道の野付半島から国後島までは 16 ㎞です。また、根室半島の突端に納沙布岬というところがあります。ここから貝殻島まではわずか 3.7 ㎞です。天気の良い日は、すぐそこに貝殻島が見えます。また、ここにはたくさんの望遠鏡が備え付けられております。そこから島を見ると家や人が歩いているのが見えます。

また、この納沙布岬には「四島のかけ橋」という返還要求運動のシンボル像が建っています。この像は全国の方々の募金によって建てられた像です。いつも「祈りの火」が赤々と燃えています。この火は北方領土が日本に還るまで燃え続けるということです。

択捉島には、戦争に関わっていることがあります。それは、真珠湾攻撃です。昭和 16 年 12 月８日、日本の連合艦隊がハワイのオアフ島に出航したことです。11 月 20 日、択捉島単冠湾に日本の連合艦隊が終結し、停泊地としました。航空母艦６隻、軍艦 25 隻、戦闘機 382 機。この単冠湾にびっしりと埋まるように停泊していたということです。11 月 26 日には一隻の戦艦もなく、村人が寝静まっている間に、静かにハワイに出航したということです。この真珠湾攻撃こそ太平洋戦争へのはじまりであったかと思います。

また、択捉島では歴史的に大事なことがあります。1798 年（寛政 10 年）、幕府は大規模な調査隊を島に派遣しました。近藤重蔵は最上徳内を案内役に択捉島に渡り、タンネモイという場所に「大日本恵登呂府」という標柱を建てて日本の領土を示しました。また、翌年にはカムイワッカに同じ「大日本恵登呂府」という標柱を建てて日本の領土を示しました。

どの島も自然が豊かで、資源も豊富、宝の島と言っても過言ではありません。

次に、私の生まれた蘂取村のことをお話しいたします。

蘂取村は漁業の村です。アキアジがあがってくる頃になると、本州や北海道からたくさんの出稼ぎの人が村に入ります。村は普段は 400 人ほどの人口ですが、出稼ぎの人たちが入ってくると 1,000 人くらいに膨れあがり、村は一気に活気づきます。アキアジは棒を立てても倒れないくらい川幅いっぱい、真っ黒になって遡上してきます。浅瀬では鮭が背びれを出して泳いでいますが、その背びれの上をネズミが走ったりするのを見たという人もいるくらいです。アキアジの漁が終わると、出稼ぎの人たちはそれぞれの故郷に帰り、また村は元の静けさに戻ります。

子供の遊びと言えば、夏は男の子も女の子も海や山や川です。川尻でカレイを足で踏んでいくらでも捕れました。魚は目で見えるくらいたくさんいました。釣り竿を入れるといくらでも釣れました。冬は雪合戦やスキーをしました。女の子はままごと遊びやお手玉などをしました。大人の楽しみは小学校の運動会、学芸会です。また、村のお祭りです。小学校の行事は子供がいなくても、村人全員が参加して楽しみました。

蘂取村には日本一のラッキベツの滝があります。何が日本一かというと、陸地から海に直接流れ落ちていて、その落差が 144mあります。松浦武四郎の日記には那智の滝よりも迫力があって美しい滝と記載されております。ちなみに和歌山県の那智の滝は 133mです。

蘂取村は自然が豊かで、平和な村でした。どの島もどの村もそうでした。島を故郷に決めた人たちは、明るい希望を持って生活しておりました。

ところが、昭和 20 年８月、戦争が終わって間もなく、ソ連軍がいきなり島に上陸してきました。あちこちで物がなくなったり、強姦騒ぎがあったり、銃殺された人もいたそうです。また、年ごろの娘さんは頭を坊主にし、男の格好をして隠れたりしたということです。私の村では、そのようないざこざは、あまりなかったように聞いています。しかし、ソ連兵がいつも鉄砲をもっていたので、大変恐ろしかったという記憶はあります。また、根室に近い人たちは、ソ連の厳しい目を縫って脱出した人もいましたが、時化に遭い、船が転覆し、帰らぬことになった人も随分いらしたとのことです。

ソ連人とは２年間、一緒に生活しました。私の家族は７人家族でした。両親と姉２人、私と弟、妹です。一番上の姉は、中学生でしたので網走のおじの家で中学校に通っていました。島には小学校しかなく、中学生になるとみんな北海道に出て勉強したんです。四島には小学校が 39 校ありました。生徒も全部で当時 2,982 名いました。択捉島には 12 校の小学校がありました。

小学校は、ソ連の子供たちは体育館で、日本の子供達は教室でそれぞれ勉強しました。ソ連の校長先生は、「自分たちは後から来たものだから、体育館でいい」と言ったそうです。休み時間も、家に帰ってからもみんな一緒に仲良く遊びました。子供だったからかもしれませんが、何の違和感もなく仲良く遊んだことが思い出されます。

私の母は、村で一人だけミシンを持っていました。将校の奥さん達のドレスなどを縫ってあげていました。ソ連が入ってきてからは電信線が切断され、北海道との船の航行が禁止されておりましたので、食料が不足しました。そのため、食料を得るために着物や帯、時計と交換しました。その交換した着物は、ドレスやベッドカバーに早変わりしておりました。

ソ連の人たちの食べ物は、黒パンです。厚い黒パンにバターをたっぷり塗り、その上に砂糖をかけて食べていました。パンを作るとき、その頃はボウルや鍋も少ないので、自分が顔を洗う洗面器を使ってパンの生地をこねていました。また、宿舎で兵隊がたくさんおります。パンを作る釜がないといって、火葬場のレンガを壊して持ってきて、それでパンを焼く窯を作ったり、墓石を持ってきて家の土台にしたりして、日本では考えられないようなことをしていたと、あとで聞きました。

私が小学校２年生の時、引き揚げの日が来ました。

父や母は、写真やたくさんの書類を、家の前の庭に穴を掘って埋めました。写真とか書類を持って行くとスパイ行為となるため、持って帰れません。村の人たちは少しの荷物を持って、蘂取村からトッカリモイの入り江にある番屋まで何キロも歩いて行き、そこで数日過ごし、船が来るのを待ちました。

いよいよ船に乗るときになって、私の父だけが島に残るよう命令を受けました。私の父は水産孵化場の技師だったので、ソ連の人たちにその技術を教えるため、一人だけ残されたということです。船が出るときに、父と今生の別れをしました。本当に悲しかったです。

船は蘂取から曽木谷（そきや）まで移動し、そこの番屋で数日間、ソ連の引揚船の到着を待ちました。子供達は朝早くから表に出て遊んでいます。私の旧姓は「臼井」といいます。遊んでいるとき、大人の誰かが大きな声で「臼井さんが来た」と叫びました。私はびっくりして後ろを振り返ると、朝靄の中を父が白い馬に乗って駈けてくるが見えました。村の人たちがたくさん出てきて大騒ぎになりました。もう会えないと思っていた父に会えたのです。あの時の感激は一生、忘れることはできません。

父の話ですと、私たちが蘂取村を出るとき、家で一緒に住んでいた将校はソ連の本土へ出張し

ており、いませんでした。将校が帰ってきたらが父だけがいたので、いろいろと理由を聞かれたそうです。その将校は上官に何回も掛け合ってくれて、父が帰ることを許されました。父はすぐさま、家で飼っていた真っ白い馬の「シロ」に乗って、夜通し、寝ずに細い道を走りに走って曽木谷に着きました。そして引揚船に間に合いました。

あの時の光景を思い出すたび、今でも涙が出ます。本来であれば将校は敵国の人です。でも、家族一緒に帰れるように上層部に懇願してくれました。人間として、将校の優しい気持ちを今でも忘れることはできません。個人個人はみんないい人ばかりでした。

曽木谷からソ連の貨物船に乗って、別飛（べっとぶ）、紗那（しゃな）、留別（るべつ）、内保（ないぼ）とそれぞれ村の人達を乗せて、樺太（サハリン）の真岡（まおか）に向かいました。貨物船ですから、大きな船底でに何百人の人たちが寝泊まりしました。甲板の上に上がるには、細いはしごを登らなければなりません。子供ですから、トイレに間に合いません。大人は、おまるのようなものをたくさん用意してくれて、子供はそこで用を足しました。大人は、甲板に上がってもトイレはたくさんないので、甲板のあちこちで用を足した人がたくさんいました。その臭いがものすごく、波が来るとそれが流れてきます。大変な引き揚げでした。

真岡に到着しました。収容所は港から遠いところにあり、そこに半月くらいいたでしょうか。またトイレの話になりますが、学校の校庭にトイレが深く列をなして掘られてありました。ただ板を渡しただけのトイレでした。すごく深いトイレでした。母からは「一人でトイレに行ってはだめ。」といつも母から言われました。そこに落ちて亡くなった子供がたくさんおりました。

食事も粗末なものでした。栄養失調になったり、病気になったり、亡くなった人もたくさんおりました。

日本の船が迎えに来て、真岡を離れ、函館港に着きました。でもすぐには降りられませんでした。そのときに赤痢が流行っていましたので、また別の船に乗り換え、そこで何日か過ごしました。下船するときに、消毒用のＤＤＴを頭の上から、背中から体中、真っ白にかけられました。船を降りたとき、母は「ああ、これで父さんがソ連の命令で船から降ろされることはない。」と安心したように言っていました。

父の仕事の関係で、あちこち転校して歩きました。小学校は４回、変わりました。どの学校もみんな優しくしてくれたので、楽しい思い出ばかりです。

戦争が終わり、引き揚げてきた人が四島返還に向けて広がる中、墓参、ビザなし交流、自由訪問の事業が始まりました。

今では日本から１万人以上の人たちが四島を訪問しています。そして、ロシアの方からも、7,600 人以上の人が日本を訪れ、交流を深めています。

一昨年の７月、自由訪問で私が生まれた故郷に行ってきました。朝、根室港を出て、国後島の古釜布（ふるかまっぷ）で入域手続きを済ませ、クマ対策のハンター３名も乗り込みました。国後水道を通り、択捉沖に着くのは次の朝です。ここに来てもすぐに村には行けません。港がありません。船から伴走船に移って途中まで行き、そこから 10 人くらいずつ小型ボートに乗って砂浜に上陸します。

いつも思い描いていた山、川は昔のままの姿で、私たちを迎えてくれました。懐かしくて涙が止まりませんでした。初めて行った人たちは、感激で言葉もありません。どこかで「ただいま。」という声が聞こえました。

いまでは村の面影は何もありません。村だったところは砂原と草原になっていました。たくさんあった家はみんな壊されたり、焼かれたり、燃料として使われたと聞きました。また、日本の影を残さないためとも聞きました。島民の人たちと墓地に向かう途中、この辺に何があった、ここは役場があった、ここは井戸があった、そんなことを言いながら墓地に向かいました。

墓地は、昔は小学校の横の小高い丘の上にありましたが、今は村外れの平らなところに移されておりました。

墓は草の中に埋もれていました。皆で草刈りをして、慰霊祭をするために祭壇を設営して、近くに咲いていた花をたくさん取ってお墓に供えました。お経を聞きながら、長い間のご無沙汰をお詫びしながら、みんなでお参りをしました。島に眠るご先祖様はどんなにか私たちが来ることを待ちわびていたことでしょう。

住んでいたころは、川向こうがハマナスの群生地だったのですが、今は村側にもたくさんハマナスが群生しています。生態系が変わりつつあるなということを実感しました。

私は、これまで２回、自分の生まれたところに行っておりますが、最初に行ったときには、警備兵が数人とその家族が住んでおりました。でも、今回は魚を捕っている４名の漁民だけでした。開発されていないことに、なぜかホッとしました。今は、自然保護区になっているとのことです。そのロシア人が、私たちに花咲ガニをごちそうしてくれました。ロシア人のおもてなしの心に感謝しながら花咲ガニをご馳走になりました。とてもおいしかったです。さすが蘂取の味でした。

近年、日本の領土でありながら、周辺の国々が領土権を主張して、厳しい対応が求められています。韓国とは島根県の竹島問題、中国とは沖縄県の尖閣諸島問題です。そして、ロシアとは北方領土問題です。北方領土はソ連が不法占領してから今年で 68 年になります。今では、多くの元島民の皆さんがお亡くなりになられました。返還を夢見ていた人たちです。どんなにか無念だったかと思います。17,291 名いた島民も、今では半数以下になりました。平均年齢が 79 歳になります。

北方領土返還については、今なお日本とロシアで交渉を続けているところですが、一向に進展のきざしは見えておりません。私たちは長い間返還運動を続けています。また、全国の人も返還運動を続けています。帯広では平原祭り、氷祭り、北方領土の日の２月７日に北方領土返還要求の署名運動をしています。皆さん、署名運動に協力してください。

北方領土の日がなぜ２月７日といいますと、1855（安政元）年２月７日、ロシアとの国境を

択捉島とウルップ島との間に決めました。政府は昭和 56 年から北方領土の日を２月７日と決め、現在に至っております。

どうぞ皆さん、北方領土に関心を持ってください。北方領土は島民だけの島ではありません。資源ある北方領土は日本国民すべての財産です。日本固有の領土である北方領土については、正しい知識と認識を持って学習していただきたいと思います。

一日も早く両国が平和条約を結び、北方領土が日本に返還され、安定した友好関係が持てるよう願うばかりです。

短い時間ですべてのことはお話できませんでしたが、また機会がありましたらお邪魔したいと思います。

生徒の皆さん、今日は静かに、真剣に話を聞いていただいてありがとうございました。これで終わります。

＜訪問校＞

・音更町立駒場中学校（平成２４年１０月４日（木））

・清水町立御影中学校（平成２４年１１月１日（木））

・池田町立池田中学校（平成２５年２月１４日（木））